

『ナルニア国年代記物語』に見る色彩表現の機能と効果 —風景描写を中心に—

川原 有加

日本大学大学院総合社会情報研究科

Color Descriptions of Landscape in *The Chronicles of Narnia*

KAWAHARA Yuka

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This paper is a study of the relationship between landscape descriptions and the use of different kinds of colors in *The Chronicles of Narnia*. Narnia is the imaginative world created by C. S. Lewis.

Firstly, he always correlates the appearance of Aslan with both the use of ‘gold’ or ‘golden’ and changes of the color description of Narnian landscape. This strategy produces the allegorical atmosphere of the stories and it shows a close connection between character descriptions and landscape descriptions. Secondly, the depiction of the creation and the end of Narnia is similar to that of *Genesis* and *Revelation*. The imaginative representation of the biblical episodes vivifies the beginning and the end of the world. Thirdly, Narnian landscape is an idealized image of our real world. For Lewis, our world is a shadow of Aslan’s real world.

With his color descriptions of Narnian landscape, Lewis expresses not only his faith but also his longing for his earthly and heavenly home.

序

C. S. ルイス (Clive Staples Lewis, 1898-1963) の代表作の一つ『ナルニア国年代記物語』(*The Chronicles of Narnia*, 1950-1956) は、ルイス自らが言わずにいられないことを適切に表現するために、様々な物語技法を駆使しながらファンタジー形式によって書いた作品である。

本論文では、色彩表現の観点から、ナルニア国の風景描写を精査し、色彩表現が物語の舞台として物語構成上においていかなる効果と役割を果たし、作者ルイスの意図をどのように表現しているか具体例を挙げて考察を進めていく。

1. 物語構成の特色

『ナルニア国年代記物語』の特色の一つは、物語の出版順と物語の舞台となるナルニア国の歴史順とが異なることである。『ナルニア国年代記物語』全7

巻は、『ライオンと魔女』(*The Lion, the Witch and the Wardrobe*, 1950) を筆頭に『さいごの戦い』(*The Last Battle*, 1956) まで一年に一冊ずつ出版された。しかし、ナルニア国の歴史順で見ると6番目に出版された『魔術師のおい』(*The Magician's Nephew*, 1955) が、最も古い時代の物語となっており、最終作が『さいごの戦い』である以外は出版順とは違う。ルイスは歴史順で読むことを勧めているものの、出版順と歴史順の二通りで物語を味わうことができる。

『ナルニア国年代記物語』は出版順と歴史順が異なっているが、一作品一作品が独立した物語でありながら全体として一つの統一された物語となっているのは、物語の中心的登場人物であるライオンのアスラン (Aslan) の存在と物語の舞台である別世界ナルニア国の描写にある。アスランは、全巻に登場する唯一の登場人物として物語の基軸となり、不変的で絶対的存在としてすべての物語を結び付ける役割

をしている。また、物語の舞台であるナルニア国は、作品によって様々な風貌を見せるが、アスランに出会うことができる世界として、登場人物ひいては読者に常に憧れを抱かせる場所である。このような物語設定は、ルイスの巧みな物語技法によって支えられており、色彩表現は、その物語技法の一つとして、ナルニア国を堅固な別世界として成立させている主要な手段の一つであると言える。

2.ナルニア国の風景描写における色彩表現

(1) ナルニア国の誕生

物語の舞台となるナルニア国の誕生の場面は、『魔術師のおい』中盤の第8章に描かれている。ディゴリー(Digory)少年が指輪を使ってロンドンの街中から移動しようとする。気がつくと同は暗闇の中にいて、恐怖感に襲われるが、一緒についてきた馬車屋が気晴らしに讃美歌を歌い始める。歌は終わるが、どこからかどんな音よりも美しい歌声が聞こえて来る。しばらくすると星が光り輝き、歌い出す。さらに地上の歌声もますます強いものとなっていく。やがて星の声はだんだん小さくなっていくが、はるか遠く地平線の近くで空の色に変化が起こる。

The eastern sky changed from white to pink and from pink to gold. The Voice rose and rose, till all the air was shaking with it. And just as it swelled to the mightiest and most glorious sound it had yet produced, the sun arose. (MN, p.109)¹

¹ 本論文において *The Chronicles of Narnia* (『ナルニア国年代記物語』) の引用は下記の〔使用テキスト〕を用い、引用箇所は括弧内に下記の略語と引用ページ数を示す。

〔使用テキスト〕

LWW — C. S. Lewis, *The Lion, the Witch and the Wardrobe*. New York: HarperCollins Publishers, 1994.

PC — C. S. Lewis, *Prince Caspian*. New York: HarperCollins Publishers, 1994.

VDT — C. S. Lewis, *The Voyage of the 'Dawn Treader'*. New York: HarperCollins Publishers, 1994.

SC — C. S. Lewis, *The Silver Chair*. New York: HarperCollins Publishers, 1994.

空の色は、無彩色の‘white’から次第に朝日の赤い光が当たっていくことで‘pink’へと変化し、さらに明るく輝きを増して‘gold’へと変化していく。それに合わせて歌声もだんだん大きくなり、最後には太陽が昇り、暗闇から解放され、夜明けとともにナルニア国が誕生したことが明らかになる。

空の色の‘gold’への変化は、アスランを連想させる。それは、アスランの頭、たてがみ、背中などアスランの姿の描写には‘gold’が使用されているからである。そしてその直後、アスランが姿を見せ、歌声の主もアスランであることが判明する。東は「輝く」が原義で、太陽が昇る方角として古代から人類にとって大切な方角とされ、さらにキリスト教ではエデンの園がある聖なる方角とされている²。この場面はただ空の色の移り変わりを描写しているだけでなく、ナルニアのキリストのような存在であるアスランの到来を予期させる働きを担っている。

『魔術師のおい』に描かれているナルニア国の誕生場面は、聖書³の「創世記」に呼応していることはこれまでの先行研究においても言われているが、色彩描写の面から見ると聖書との関連性はさほどないように考えられる。その理由は「創世記」には色彩の明示的描写は全くないが、ルイスはナルニア国の誕生場面に際し、詳細な色彩表現を施しているからである。ナルニア国の誕生場面のほうが「創世記」よりはるかに広がりがあると言える。しかし、ルイスはナルニア国の誕生場面のすべての部分に色彩表現を用いているわけではなく、重要視している箇所に色彩表現を使用している。この場面のように暗闇から明るい光が射してくる様子は、「創世記」においても最初の場面であり、重要である。『ナルニア国年代記物語』に描かれているナルニア国の誕生の過程

HBB — C. S. Lewis, *The Horse and His Boy*. New York: HarperCollins Publishers, 1994.

MN — C. S. Lewis, *The Magician's Nephew*. New York: HarperCollins Publishers, 1994.

LB — C. S. Lewis, *The Last Battle*. New York: HarperCollins Publishers, 1994.

² 西岡秀雄『東・西・南・北・右・左—方位のはなし』、北隆館、1996年、3ページ参考。

³ 本論文においては『聖書 新共同訳』(日本聖書協会、1987年)を使用する。

は、「創世記」の始原の物語冒頭の記述内容を逸脱することなく、ルイスが想像力を駆使して創作した世界であり、ルイスは色彩表現において聖書の内容を、そして自分の言いたいことを誰もが理解できることを意図しているのではないかと考えられる。

またこの空の変化は、『ライオンと魔女』において殺されたアスランが再び姿を見せる時の空の色の变化と酷似している。『ライオンと魔女』第15章では、白い魔女 (the White Witch) に殺されたアスランの近くに居合わせたルーシィ (Lucy) とスーザン (Susan) が、体を暖めるために歩いていたとき、空の色に変化が起こる。

The country all looked dark gray, but beyond, at the very end of the world, the sea showed pale. The sky began to turn red....the red turned to gold along the line where the sea and the sky met and very slowly up came the edge of the sun. (LWW, pp. 160-161)

夜明けが近づき、東の空が ‘dark gray’ から ‘red’ へ、さらに ‘red’ から ‘gold’ へと変化し、朝日が昇ってくる。この色彩の変化は、「アスランが殺された」という暗く悲しい状況とは相反し、何か明るい方向へ向かっていく印象を与える。水平線が ‘red’ から ‘gold’ に変化し、東の空に朝日の先が姿を現わす様子は、アスランの登場を予想させる。そしてその直後、アスランが甦るという展開となる。

出版順により『ライオンと魔女』から読み始めた読者は、東の空の色彩変化から、アスランとの結びつきを予期し、物語はアスランが再び登場する場面へと続いていく。一方、ナルニア国の歴史順により『魔術師のおい』から読み始めた読者は、この場面にはまだアスランは登場していないが、東の空の色彩変化と最終的に ‘gold’ に変化したことに対して何か起こりそうな予感を抱く。そしてその直後、この場所にアスランがいることがはっきり明記され、アスランと出会うことになる。したがって、出版順、歴史順どちらの順序で読んでも読者は色彩表現を通してアスランの出現を察知しながら、物語展開の重大な局面を迎えることになるのである。

(2) ナルニア国の自然

ナルニア国には様々な自然の風景が描かれている。ここでは、山、海、川の風景を中心に見ていく。

ナルニアの風景を創造したのは、『魔術師のおい』において描かれているとおり、アスランである。ナルニア国の誕生直後、ディゴリーたちは自分たちのいる場所の風景をアスランの歌声とともに昇って来た陽光によって知ることになる。

It was a valley through which a broad, swift river wound its way, flowing eastward toward the sun. Southward there were mountains, northward there were lower hills. But it was a valley of mere earth, rock and water; there was not a tree, nor a bush, not a blade of grass to be seen. The earth was of many colors; they were fresh, hot and vivid. (MN, pp.109-110)

東のほうに向かって川が流れ、南には高い山、北にはそれより低い山が連なっており、西の方角以外の風景を知ることができる。その谷間は土と岩と水ばかりで木もなく、草も生えていない。しかし、大地は様々な色で覆われており、新鮮で熱くて生き生きしている。大地の色彩は様々な色があふれているが、具体的な色彩表現はなされていない。どのような色彩であるかは読者の想像力にゆだねられている。

さらに『魔術師のおい』第9章では、アスランが新しい歌を歌いながら、何もなかったところからナルニア国の自然を創造していく場面が描かれている。その歌は星々や太陽を呼び出した歌に比べて優しく、かるやかで、穏やかなさざなみのような音楽である。

And as he walked and sang the valley grew green with grass. ... Soon there were other things besides grass. The higher slopes grew dark with heather. Patches of rougher and more bristling green appeared in the valley. ... It was a little, spiky thing that threw out dozens of arms and covered these arms with green. ... When they were nearly as tall as himself he saw what they were. “Trees!” he exclaimed. (MN, pp.112-113)

まず、アスランは谷間に草を、次に木を生やす。草と木が生え、次々と生命が宿っていく様子は、‘green’を用いた描写によってより鮮明になっている。しかし、草・木それぞれの描写方法にはやや相違がある。草の場合、歌声とともに草が広がって生えていく様子が描かれ、‘green’は次々に生えていく草の色として用いられている。一方、木の場合、最初は〈木〉であることは具体的に描かれず、その色‘green’を用い、何かの成長の様子としてとらえ、最後にそれが木であることがディゴリーの発言によって明らかになる。木の誕生のほうが強調された描写となっており、ルイスは木のほうを重要視していたのではないかと考えられる。木への愛着はこの後に誕生する金と銀の木の描写からも推測できる。このように草と木にはともに‘green’が用いられて描かれているが、ルイスの巧妙な物語技法によって同じ色彩であっても異なる印象と効果を発揮している。

続く第12章では、ディゴリーとポリー（Polly）はアスランの命によって西の方角にある果樹園にりんごを採りに向かうことになる。

Now the land of Narnia ends where the waterfall comes down, and once you have reached the top of the cliffs you will be out of Narnia and into the Western Wild. You must journey through those mountains till you find a green valley with a blue lake in it, walled round by mountains of ice. At the end of the lake there is a steep, green hill. On the top of that hill there is a garden. (MN, p.155)

ディゴリーは、アスランから果樹園までの道を教わる。ここで西の方角の風景が明らかとなる。彼らがいる場所から目的地ははっきり見ることができないが、アスランの話から滝、崖、荒野、山々、丘など厳しく変化に富んだ景色が続いていることが分かる。その中でも湖の色‘blue’や谷間の色‘green’など目印になる風景をアスランは色彩を用いて的確に説明している。それはディゴリーの理解を助け、ディゴリーたちは無事に西の果樹園に到着する。

ところで、『魔術師のおい』ではナルニア国の山々や木々の描写には‘green’が使用されているが、こ

のような‘green’の使用例は、ナルニア国が誕生する前の場面から見られる。

ディゴリーとポリーは木々がびっしり生えている世界と世界のあいだの林に迷い込む。

The trees grew close together and were so leafy that he could get no glimpse of the sky. All the light was green light that came through the leaves; but there must have been a very strong sun overhead, for this green daylight was bright and warm. (MN, pp.31-32)

林の木々は緑豊かにびっしりと茂っていて、射している光が緑に見えるほどであり、林の木々の緑の深さを表わしている。その光は、明るく暖かで力強い。光は‘green’で描写されているが、これは木々の緑深さから来ている。その後、ディゴリーたちは不安になったとき、緑の光のあるこの林の世界に戻りたいと感じる。林の木々、そこにあたる光の‘green’は、ディゴリーたちに安らぎと力を与えている。この緑深い世界は、その後誕生したナルニア国の山、林、草木などの自然風景を象徴する色彩となる。またこの光景は、近代化により森林破壊が進んでいた当時の社会への批判も込められている。

また『馬と少年』(The Horse and His Boy, 1954) 第10章においては、アーケン国とナルニア国の国境で、シャスタ(Shasta)やアラビス(Aravis)たちは想像していたよりも緑が濃く、いきいきした様子を目する。彼らの目の前に広がっていた光景は、これまでに目にすることがない緑豊かな光景であり、彼らはその視覚的要素から活力を得ることができる。さらに、馬のプレーもナルニア国が〈緑の国〉である印象を持っていることを口にする。彼らにとって‘green’は憧れのナルニア国を象徴する色彩となっている。

その後、シャスタたちは軍勢の追手を感じ、全速力で逃げるが、目の前に壁が立ちはだかる。しかし、その中央には開かれた門があり、シャスタたちは向かっていく。そのとき、門の前でアラビスが後ろからライオンに襲われる。負傷したアラビスは、門の向こうにいた南の国境の仙人のもとで傷を癒す。

The weather had changed and the whole of that

green enclosure was filled, like a great green cup, with sunlight. It was a very peaceful place, lonely and quiet. (HHB, p.149)

門をくぐった先の場所は、‘a high wall of green turf’で覆われた広く丸い囲いのようなところである。そしてその緑の囲いの中には日の光が射している。その光は、単に明るい日の光だけでなく、囲いの色‘green’が生命力を注ぎ込んでいるようである。シャスタはアーケン国に向かうために、アラビスを残して旅立つ。アラビスはシャスタが行ってしまったことで寂しい気持ちになるが、この場所はとても静かで平和であり、アラビスは心身ともに回復する。‘green’はナルニアの自然を象徴する色彩として彼女に安らぎと生きる力を与えるのである。

このように山、森、林、草原などの色彩は、別世界ナルニア国であっても現実世界と同じ‘green’で表わされている。これは、ルイスの故郷アイルランドあるいはイングランドの田園風景を思わせるものであり、ルイスの憧れの原点の風景の色彩である。ナルニア国の風景には、ルイスが憧れた自然豊かなアイルランドやイングランドの風景への望郷の念と同時に近代化によってその自然が破壊されていることへの社会批判の念が込められていると言える。

他方、ナルニア国の東側には海が広がっている。ルイスは、自分は海が好きであることを手紙に書いており⁴、ルイスにとって海はお気に入りの風景だったと考えられる。

『カスピアン王子のつのおえ』(*The Prince Caspian*, 1951)にて、ペヴェンシー一家の子どもたちがナルニア国に入ったとき最初に目にする光景は、目がくらむほどの海の青さであった。

また、『朝びらき丸 東の海へ』(*The Voyage of 'Dawn Treader'*, 1952)は、東を目指してナルニア国の外海を航海する物語である。物語の冒頭、ユーステイス (Eustace)、エドモンド(Edmund)、ルーシィが部屋にある船の絵を見ていたとき、波にさらわれるようにナルニア国に入っていく。そのときの波の色

として‘blue’が使用されている。気がつくや航海中の船の上にいたユーステイスは、船の舷側に走り寄り、次のような景色を目にする。

What he saw was blue waves flecked with foam, and paler blue sky, both spreading without a break to the horizon. (VDT, pp.13-14)

この場面では波の色だけでなく、空の色も‘blue’が用いられているが、‘paler’を使用することによって波と空の色の微妙な違いを提示し、目の前の光景をより鮮明に表わしている。水平線のかなたまで続いている波と空の風景は、広がる青空の下にある穏やかな青い海を連想させる。しかし、ユーステイスはこの穏やかで永続的な景色とは対照的に自分の置かれている状況がよく理解できず、不安感が募っている。美しい海の景色の様子を好印象にとらえていないユーステイスの視点を通して描写しているところにルイスの巧妙さが読み取れる。

その後、航海途中に見える海の色表現として‘blue’が用いられている箇所は、第3章での‘the sea very dark blue with little white caps of foam’ (VDT, p.36)、第12章での‘For a few feet in front of their bows they could see the swell of the bright greenish-blue water’ (VDT, p. 177)や‘the gilded stern, the blue sea, and the sky, were all in broad daylight’ (VDT, p.180)などであり、それほど頻出していない。最も詳細に描写されているのは、上記にも例示している第12章である。この章では、航海中で最も危険と不安につつまれる暗闇の中へと入ってしまう。やっと暗闇を抜け出した一行の目の前には次のような光景が広がる。

In a few moments the darkness turned into a grayness ahead, and then, almost before they dared to begin hoping they had shot out into the sunlight and were in the warm, blue world again. And all at once everybody realized that there was nothing to be afraid of and never had been. (VDT, p.187)

暗闇から明るい情景へ次第に変化していく様子は、まず‘grayness’を用いて描写され、やがて暗闇から

⁴ Walter Hooper ed., *The Collected Letters of C. S. Lewis Volume II*. New York: HarperCollins Publishers, 2004, p. 1949.

完全に抜け出して到達したところを‘blue world’を用いて表わしている。‘blue world’は一行に安心感をもたらす、もとの穏やかな明るい青い海が広がる世界であることを暗示している。これまでの物語の背景および展開から、‘blue world’は青い海が広がる世界であることを読者は容易に連想できる。

そして、一同は後ろを振り返り、改めて周りの景色を確認する。

They all looked. But they saw only bright blue sea and bright blue sky. The Dark Island and the darkness had vanished for ever. (VDT, p.188)

海と空の色として‘blue’が明確に使用されていることで、‘blue world’が青い空と海が広がる世界を指していることを確信することができ、一同だけでなく、読者にも安堵感を与える。これまでの波や空の色彩表現から穏やかな航海の様子が連想され、‘sea’を用いたり、さらに直接‘blue’で形容しなくても青い海の色を連想することができる。また、ルイスは海の場合での色彩描写には山などの場面ではあまり用いられていない‘dark’や‘bright’など明暗を表わす語を併用することによって、色彩表現に幅をもたせ、情景をより鮮明に表現している。

その海の色に変化が起こる。その兆候は、第14章でのこの世の果ての入口におけるラマンドゥ(Ramandu)とその娘の登場場面に見られる。

And as they sang, the gray clouds lifted from the eastern sky and the white patches grew bigger and bigger till it was all white, and the sea began to shine like silver. And long afterward (but those two sang all the time) the east began to turn red and at last, unclouded, the sun came up out of the sea and its long level ray shot down the length of the table on the gold and silver and on the Stone Knife.(VDT, p.205)

まず、東の空の雲が切れ、そこから射してきた光が次第に広がり、海も輝き始める。空から海へと視点を移動させながら、雲の‘gray’から‘white’へ、

さらに輝き加わる‘silver’への色彩の変化を表している。さらに、東の空から昇ってきた朝日を‘red’を用いることで強調している。その朝日はこれまでに中で最も激しく輝いているものであり、アスランを連想させる。一方、この‘red’は朝日の光があたる石のナイフに読者の視点を向けさせる。この石のナイフは『ライオンと魔女』において白い魔女がアスランを殺したときに使われたものであり、‘red’はアスランが流した血の色を連想させ、物語を回顧することができる。このことは物語の一貫性が保たれていることを意味している。

先に進んで行くと、辺りの風景にさらなる変化が起こり始める。

And when, after some consultation, the Dawn Treader turned back into the current and began to glide eastward through the Lily Lake or the Silver Sea (they tried both these names but it was the Silver Sea that stuck and is now on Caspian’s map) the strangest part of their travels began. Very soon the open sea which they were leaving was only a thin rim of blue on the western horizon. Whiteness, shot with faintest color of gold, spread round them on every side, except just astern where their passage had thrust the lilies apart and left an open lane of water that shone like dark green glass. (VDT, p.236)

海の色はこれまでの‘blue’から‘silver’になり、水平線の細長い筋のみが‘blue’である。そしてスイレンの花の色は‘white’ではなく、‘gold’をまじえた色彩であり、高貴な輝きに加わっている。航路の色として‘dark green’を用い、より丁寧に描写している。『朝びらき丸 東の海へ』の終盤を迎え、これまでの航海での景色とは異なった色彩表現の変化の描写によって、物語展開の変化を明確に示唆している。そして一行は、アスランの国に入っていく。ルイスはナルニア国の創造に現代世界だけでなく、中世の時間や空間の概念を取り入れている⁵。ナルニ

⁵ Mary Frances Zambreno, ‘A Reconstructed Image: Medieval Time and Space in *The Chronicles of Narnia*’, in Shanna Caughey ed., *Revisiting Narnia: Fantasy, Myth and*

ア国と中世の地理と比較して最も意味深いのは、アスランの国の位置である。これまでも指摘されているように、『朝びらき丸 東の海へ』では、アスランの国はこの世の果ての東にあるが、そこは中世の原型ではこの世の楽園があったところであり⁶、ルイスの理想の世界の風景であると言える。

ナルニア国の川に関して見ると、描写されている箇所はそれほど多くなく、色彩表現が直接使用されているものはさらに少ない。

『魔術師のおい』では、ディゴリーとポリーはアスランの忠告に従い、緑のある谷を頼りに西の園の果樹園を目指す。やがて雪が積もった大きな山々が高くそびえ、そのはるか下の景色に目を奪われる。

The valleys, far beneath them, were so green, and all the streams which tumbled down from the glaciers into the main river were so blue, that it was like flying over gigantic pieces of jewelry. (MN, p.168)

はるか下のほうに見える谷間の色は‘green’、そこを流れる川の色は‘blue’で表わされている。その色彩の交わりの美しさは、大きな宝石に例えられている。さらに、一行はえも言われぬ香が漂ってくるのを感じる。その香は暖かく、黄金色の香である。その香‘golden’はアスランを連想させ、西の園の果樹園に向かってアスランが創造したナルニアの世界を順調に旅を続けていることが分かる。

また、『銀のいす』(*The Silver Chair*, 1953)の最終章である第16章において、ジル(Jill)とユーステイスはセントールに乗せてもらいながらナルニアの森の中にある川を下っていく。

They came down to the river, following bright and blue in winter sunshine, far below the last bridge(which is at the snug, red-roofed little town of Beruna) and were ferried across in a flat barge by the ferryman;(SC, p.234)

きらきらと輝く青く美しい冬の川の色彩には、『魔術師のおい』の場面と同様に、‘blue’が用いられている。またその周りの風景として、川岸の家の屋根の色として‘red’のみが色彩描写され、明るく住み心地がいい家々の様子を表わしている。それと同時に、この屋根は川の最後の橋にかかっている町の家の屋根ということ、その色彩が‘red’であることからその後に関することになるカスピアン王の死を暗示しているとも考えられる。

そして、ジルとユーステイスはカスピアン王が亡くなり、吊っている場面を目にする。気がつくと二人は天上にいて、目の前にアスランが現れる。二人は先ほどとは違う川の光景を見る。

Then Aslan stopped, and the children looked into the stream. And there, on the golden gravel of the bed of the stream, lay King Caspian, dead, with the water flowing over him like liquid glass. His long white beard swayed in it like water-weed. (SC, p.238)

ガラスのように美しい水が流れている川の姿が描写されているが、川の色は具体的に表記されていない。しかし、川底の砂利の色‘gold’とその上を水草のようにそよぐ王の長い鬚の色‘white’が川の様子を表わしている。砂利の色‘gold’はアスランを象徴する色彩であり、この場面の神聖さが伝わる。そして王の鬚はやがて変化していく。

At the same moment the doleful music stopped. And the dead King began to be changed. His white beard turned to gray, and from gray to yellow, and got shorter and vanished altogether;(SC, p.238)

王の鬚は‘white’、‘gray’、‘yellow’と変化していき、短くなってなくなる。王の鬚の色彩は次第に色がつき、王は若々しさを取り戻して甦っていく。鬚は最終的に‘yellow’として明るい色となり、命が注がれるようである。動的な印象をもたらす川は

Religion in C. S. Lewis's Chronicles. Dallas: Benbella Books, Inc., 2005, p.254.

⁶ Ibid., p.259.

生と死の流れや再生の象徴⁷である。川での王の鬚の色彩変化は、この場面の前にすでにアスランが登場していること、川底の砂利の色がアスランを象徴する‘gold’であることなどを踏まえると何か善きことが起こる予感をもたらす。そしてこの後、王がよみがえる場面へとつながる。

このようにナルニア国は豊かな自然に囲まれた国であることが読み取れる。しかし、色彩表現が使用されている箇所はそれほど多くないが、描写されている部分は作品展開に大きく関与している箇所が多い。ナルニア国の自然は、現実世界でありふれた風景が中心であり、そこに描写されている色彩も現実世界で目にするものと同じである。同時に、この世の果ての世界や天上の世界など非現実の世界の風景は、普段見られないような色彩やその変化が伴う。どちらの風景の色彩にもナルニア国の風景の創造者であり、ナルニア国の色彩の創造者であるアスラン⁸が深く関与し、物語を支えているのである。

(3) ナルニア国の自然の変化

ナルニア国における自然の変化には、色彩表現を伴って描写されている場面が数多く見られる。

最も顕著に表れているのは『ライオンと魔女』における冬から春への季節の変化の場面である。エドモンドはそれまで魔女が支配していた冬の季節から少しずつ春に変化していくことを感じ始める。

And now the snow was really melting in earnest and patches of green grass were beginning to appear in every direction. Unless you have looked at a world of snow as long as Edmund had been looking at it, you will hardly be able to imagine what a relief those green patches were after the endless white. (LWW, p.119)

この場面では、白い雪が次第に溶けていき、緑の

草がだんだん見え始めた様子が描かれている。一面に広がっている‘white’の中に‘green’が点々と姿を見せる様子は、変化が少しずつ起こっていることを表わしている。〈語り手〉はその風景の色彩の変化からエドモンドに安堵感が生じたことを記述する。さらに辺りの変化は続く。

Every moment the patches of green grew bigger and the patches of snow grew smaller. Every moment more and more of the trees shook off their robes of snow. Soon, wherever you looked, instead of white shapes you saw the dark green of firs or the black prickly branches of bare oaks and beeches and elms. Then the mist turned from white to gold and presently cleared away altogether. Shafts of delicious sunlight struck down onto the forest floor and overhead you could see a blue sky between the tree tops. (LWW, p.120)

冬から春への森の変化の様子がさらに様々な色彩描写によって詳細に描かれている。木々の枝々は‘white’から変化し、さらに霧も‘white’から‘gold’へと変化して、春の到来の明るさと喜びが表れている。『ライオンと魔女』では、この場面までに白い魔女を象徴する色彩として‘white’が多用されているが、‘white’から‘gold’への霧の色彩変化は、白い魔女の支配が終わり、魔女と相反するアスランの世界への変化を暗示している。しかし、このときはまだアスランは姿を表わしていないが、ビーバー夫婦の話からアスランの存在を知っている読者は、色彩描写とその変化の様子がアスランの到来と関連していることを想定できる。また、水の音の大きさの変化も風景の変化を増幅している。

また『馬と少年』においても霧の変化の描写がある。シャスタがアスランに出会った時、彼は何かとても安心した気持ちになり、これまで知らなかったおののきが全身に伝わってくる。そのとき、周りを覆っていた霧に変化が起こる。

The mist was turning from black to gray and from gray to white. ... Now, the whiteness around

⁷ ジャン・シュヴァリエ、アラン・ゲールブラン『世界シンボル大辞典』、金光仁三郎他訳、大修館書店、1996年、265 ページ。

⁸ 竹野一雄『C. S.ルイスの世界—永遠の知恵と美—』、彩流社、1999年、237 ページ。

him became a shining whiteness; his eyes began to blink. Somewhere ahead he could hear birds singing. He knew the night was over at last. He could see the mane and ears and head of his horse quite easily now. A golden light fell on them from the left. (HHB, pp.165-166)

霧は‘black’から‘gray’、‘white’へ、無彩色の暗から明への変化となっている。最後は輝きが加わり、それまでの恐怖感にあふれていたシャスタの心理的状況も回復する。さらに鳥の鳴き声が聞こえ、ますます明るさが増し、そして朝日が射してくる。朝日の光‘golden’はアスランを象徴する色であり、『ライオンと魔女』や『魔術師のおい』における夜明け後のアスランの到来場面を連想させる。

このように色彩変化が起こっている場面では、その変化の前後にアスランが登場し、善の現存を印象づけ、さらに色彩という視覚的な面だけでなく、音という聴覚的な面も付加され、アスランが体現する善を読者に感得させようとしているのである。

(4) ナルニア国の終焉

ナルニア国は最終巻『さいごの戦い』において終焉を迎える。『さいごの戦い』冒頭よりナルニア国の終焉を予期させている。たとえば、金と銀の木についてである。

金と銀の木の誕生の様子は、ナルニア国の誕生の場面が描かれている『魔術師のおい』第14章において描写されている。

And now the children could see that it did not merely look golden but was of real, soft gold. It had of course sprung up from the half-sovereigns which had fallen out of Uncle Andrew's pocket when he was turned upside down; just as the silver had grown up from the half-crowns. (MN, p.186)

この木はナルニア国の最初の王と女王となった馬車屋のフランク (Frank) と妻ヘレン (Helen) の王冠を作った木である。

しかし『さいごの戦い』では、金と銀の木が生え

ていた風景の変化が見られる。

Right through the middle of that ancient forest—that forest where the trees of gold and of silver had once grown and where a child from out world had once planted the Tree of Protection—a broad lane had already been opened. (LB, p.26)

昔生えていた金と銀の木はもうなく、一筋の幅広い道が切り開かれている。この金と銀の木は色彩面からも『魔術師のおい』で描かれていた金と銀の木であることが分かる。ナルニア国の誕生の象徴であった金と銀の木がなくなったことでナルニア国の終焉を暗示していると同時に、近代化のため森林破壊が進んでいる当時のイギリスの自然破壊の状況の投影とも言える。

『さいごの戦い』第14章において、ナルニア国は終焉の時を迎える。地上は夜となり、どこも真っ暗で、聞いたことがないような美しい角笛の音色が聞こえる中、やがて空は流れ星でいっぱいになったかと思うと、星が降り出し、辺りは真っ黒になる。

With a thrill of wonder (and there was some terror in it too) they all suddenly realized what was happening. The spreading blackness was not a cloud at all: it was simply emptiness. The black part of the sky was the part in which there were no stars left. (LB, pp.172-173)

星がなくなり、辺り一面が真っ暗になってしまった様子は、‘black’の連続的使用によって強調されている。またそれは、辺りの暗さを表わすだけでなく、登場人物にも読者にも恐怖感をもたらす。

その後アスランが現れ、すべてのものにおいて左右二つの道のいずれに進むかの選択がなされる。ここで、アスランの左側に進んでいった者は、アスランの大きな黒い影のなかに入っていく。そのときのアスランの影は‘black’で表わされており、アスランの姿を表わす色彩としては稀な例と言える。周りの真っ黒な様子からも連想できるように、左側に進んだ者が入っていくアスランの影が‘black’で表わ

されていることで、不穏な印象をもたらしている。
しかし、やがて夜明けを迎え、太陽が昇ってくる。

It was three times –twenty times—as big as it ought to be, and very dark red. As its rays fell upon the great Time-giant, he turned red too:

Then the Moon came up, quite in her wrong position, very close to the sun, and she also looked red. And at the sight of her the sun began shooting out great flames, like whiskers or snakes of crimson fire, toward her. (LB, p.180)

昇ってきた太陽の光は‘red’で表わされ、周りを赤く照らしている。そのうちに月が昇って来るが、その月も太陽のすぐそばに昇って来たため、赤く見える。前記の場面およびこの場面は「マタイによる福音書」24章29節、さらに月に関しては「ヨエル書」3章4節の「月は血に変わる」に呼応している⁹。太陽の光‘red’は、太陽の明るさを表わしているのではなく、キリストの贖罪の血を象徴し、不気味な印象を与える。そして、アスランの声を合図に、時の巨人が太陽を手にとり、世界は真っ暗闇に包まれ、ナルニア国は終焉を迎える。ナルニア国の終焉に関する色彩表現は、‘black’や不吉な予感を抱かせる‘red’など、辺りの暗い光景を印象付けている。

(5) まことのナルニアの風景

一同は、ナルニア国の終焉を目にした後、アスランに導かれ奥の方へ進んでいく。ユーステイスは、何か見たことがあるような景色を目にする。

“I bet there isn’t a country like this anywhere in our world. Look at the colors! You couldn’t get a blue like the blue on those mountains in our world.” (LB, p.192)

ユーステイスは、山脈の色‘blue’があまりにもすばらしく、見たことがある景色ではないと感じる。

それは、ナルニア国の山の色がこれまでに主として用いられてきた‘green’ではなく、‘blue’であることから分かる。‘Look at the color!’と色彩に注目させる発言の後、さらに山脈の色‘blue’を連続して使用している。これまでに目にしてきた色よりさらに美しい色であることを強調している。

みんなも辺りを見回し、その光景がナルニアの南の国境の山々に似ていることに気付く。しかし、ルーシィはやがて目の前にしている光景のほうが、ずっと色どりがあるようにも感じる。そして、ディゴリー卿にそこがまことのナルニアの国であり、これまでのナルニア国はまことのナルニア国の影かうつしの国であることを教えられる。

一同はさらに高く、さらに奥へと進んでいく。

And they went through winding valley after winding valley and up the steep sides of hills and, faster than ever, down the other side, following the river and sometimes crossing it and skimming across mountain lakes as if they were living speedboats, till at last at the far end of one long lake which looked as blue as a turquoise, they saw a smooth green hill. Its sides were as steep as the sides of a pyramid and round the very top it ran a green wall: but above the wall rose the branches of trees whose leaves looked like silver and their fruit like gold. (LB, pp.201-202)

谷、山腹、丘などの起伏のある地形に、川や湖があり、これまでのナルニア国の風景と酷似している。色彩描写から見ても、丘は‘green’、湖の水は‘blue’である。さらに頂上の周りを取り囲む築地の色も‘green’である。そこから葉が‘silver’、実が‘gold’の木々が伸びている。この場面は「ヨハネの黙示録」22章に呼応し¹⁰、木々の色‘silver’と‘gold’はナルニア誕生の時に出来た二つの木を連想させる。一同は頂上に到着する。そこには正面に大きな門がたちふさがっている。その門の色は‘gold’である。

⁹ Paul F. Ford, *Companion to Narnia*. San Francisco: Harper& Row publishers, 1983, p. 56. / 竹野一雄、前掲書、267 ページ参考。

¹⁰ Christin Ditchfield, *A Family Guide to Narnia: Biblical Truths in C. S. Lewis’s “The Chronicles of Narnia.”* Wheaton: Crossway Books, 2003, p.192.

これは、『魔術師のおい』における西の園の果樹園の入口の門の色と同じであり、この場所がまことのナルニアにあること、さらに門の大きさから考えるとアスランの登場を予期させる。しかし、この場面の直後にアスランは姿を見せない。一同はさらに先へと進んでいく。

...—and a great, bright procession it was—up toward mountains higher than you could see in this world even if they were there to be seen. But there was no snow on those mountains: there were forests and green slopes and sweet orchards and flashing waterfalls, one above the others, going up forever. And the land they were walking on grew narrower all the time, with a deep valley on each side:....(LB, p.209)

高い山々、果樹林とほとばしる滝、深い谷は、『魔術師のおい』での描写をはじめとするこれまでのナルニア国の景色と類似している。ここで注目すべき光景は、山に雪がないことと斜面の色‘green’である。雪がないことは、『ライオンと魔女』において白い魔女が支配していたような悪の印象をもたらす冬の世界ではないことが明らかである。また、斜面の‘green’はこの場面で唯一使用されている色彩として強調され、これまでのようにナルニア国の自然を象徴する色彩としてより明確化されている。

そして、ルーシィは次のような光景を目にする。

The light ahead was growing stronger. Lucy saw that a great series of many-colored cliffs led up in front of them like a giant's staircase. And then she forgot everything else, because Aslan himself was coming, (LB, p.209)

光がひととき強くなり、さまざまな色をした崖が巨人の階段のように高くなっている。そしてアスランがルーシィに近づいてくる。光の強さや階段の大きさは、これまで同様アスランを連想させる。崖の色彩は特定の色彩ではなく、様々な色をしている。これは、まことのナルニア国の色彩美を表現してい

るとともに、最終的にどのような色彩であるかは読者の想像力にゆだねているのである。

3.ルイスと『ナルニア国年代記物語』の風景

安藤氏はルイスの愛した風景について次のように述べている。

ルイスが愛した土地はいずれも、古き良き時代（より具体的にいえば中世・ルネサンス時代）との「連続性」と保持する、変化に富んだ美しい風景を特徴とする場所であった。変化・多様性は自然、自由、生命力、多産性といった善のイメージを暗示する。ベルファースト郊外に関しては街とその背景としての丘、あるいは丘と海といった対象が一望できる点で、サリー州について言えば複雑な地形とその変化に富んだ構成要素（丘陵、溪谷、雑木林など）、あるいはオクスフォードのように長年の歴史のなかで形成された多様なコレッジや教会とそれらによって構成される不規則な街並み、ルイスが好む風景には対照と多様性が不可欠な要素であると考えてよい¹¹。

ナルニア国の風景は、幼いころ子供部屋の窓から見た田園風景への憧れに始まり、『ナルニア国年代記物語』を執筆・出版するまでのルイスの人生の中で好んできた風景の歴史と言っても過言ではない。ルイスの最初の散文作品『天路逆程』(*The Pilgrim's Regress*, 1933)に描写されている変化のある山、丘、水多き溪谷は、心の願望、楽園、まことのナルニア、天国の象徴であり¹²、ルイスは憧れ、ずっと心に描いてきた理想の風景を50歳を過ぎて執筆・出版することになった『ナルニア国年代記物語』に見事に描き出したのである。『ナルニア国年代記物語』は、山、丘、溪谷など起伏があり変化がある地形に加え、空や霧などの空間的な変化も色彩表現によって余すことなく丁寧に描写されている。そしてその変化は、

¹¹ 安藤聡『ナルニア国物語 解説—C. S.ルイスが創造した世界』、彩流社、2006年、244-245ページ。

¹² Chad Walsh, *The Literary Legacy of C. S. Lewis*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1979, p.156.

善のヴィジョンへとつながっている。

ナルニア国の風景はまさにありふれたものと非現実なものとの強い対照によって成立している¹³と言える。別世界であるナルニア国にも現実世界と同じような色彩描写がみられることで、読者はナルニア国の存在を身近に感じることができる。一方、非現実的な世界の描写は、登場人物だけでなく読者にも期待と不安を与える。しかし、どちらにおいても読者は自ら生きている現実世界を冷静に見つめ直すことができる機会を得るのである。そしてナルニア国の風景を彩る色彩は、物語の中心的登場人物であるアスランを主軸にしながら、様々な表現方法で描写され、ナルニア国の色彩美を作り出している。色彩表現はそれを読者の想像力に強く働きかけ、ルイスの世界観が盛り込まれた理想的風景を最も的確に表わす手段なのである。

結論

以上見てきたように、『ナルニア国年代記物語』の風景描写における色彩表現は、物語構成や物語展開と密接に関連し、その特色を発揮しながら様々な効果を発揮していると考えられる。

第一に、同じ色彩の連続的使用による物語の統一性である。たとえばナルニア国の山や草木の色彩としては‘green’、海や波の色彩としては‘blue’が用いられ、それは各巻で見られる。さらにこの色彩は現実世界で見られるありふれた色彩である。同じ色彩の連続的な使用は、その対象物と色彩を強調させる。読者はそのことによって、別の場面で描かれていても関連性があることを予期するのである。これは、『ナルニア国年代記物語』がナルニア国の歴史的・一貫性を色彩表現の整合性においても保ち、統一された物語となっている所以である。

第二に、色彩の変化の妙味である。ナルニア国の誕生や冬から春への季節の変化の風景、アスランの登場前後の辺りの風景は、色彩の変化を用いて詳細に描写されている。その変化は、物語展開に多大な影響を及ぼす暗から明への変化がほとんどであり、これは、ルイスが好んだ変化のある美しい風景と酷

似している。またそのような場面は、アスランを連想させる色彩である‘gold’が使用されている場合が多く、それによってアスランの登場を予期したり、アスランとの関連を強固にしたり、善のヴィジョンへと結びついていくのである。

第三に、読者の想像力の活性化を促す点である。詳細な色彩描写は読者の想像力の助けとなり、ありふれた世界であっても、非現実な世界であっても読者にその光景を容易にかつ具体的に想像させることができる。また、具体的な色彩は描写されず、その色彩美だけが述べられている場面があるが、それはその場面の色彩的な印象を固定することなく、最終的には読者の自由な想像力にゆだねているのであり、ルイスが色彩表現に細心の配慮をしていたことが理解できる。

そしてこれらをすべてに関与しているのが、様々な感覚との併用である。作品には色彩という視覚的側面だけでなく、聴覚、嗅覚、触覚など様々な感覚を伴って色彩表現がより効果的に活かされている。それは、単にその色彩を表現するだけでなく、相乗効果をもたらし、登場人物だけでなく読者も複合的な感覚でその場面と向き合うことができるのである。

ルイスは作家として、またキリスト教徒として自分の言わずにいられないことを表わすためにファンタジー形式で『ナルニア国年代記物語』を執筆した。ルイスはありふれた風景と非現実的な風景を兼ね備えた世界として、自らが好んだ変化に富んだ美しい風景を基盤とし、聖書的背景を踏まえながら、物語の舞台である別世界ナルニア国を表現したのである。『ナルニア国年代記物語』の風景描写における繊細で巧みな色彩表現は、ルイスの絶妙な物語技法であり、その色彩表現は読者の想像力を飛翔させ焦点化させる。それが壮大な物語としてのナルニア国を支え、美しく憧れと歓びに満ちたナルニア国の風景を作り上げているのである。

(Received: May 31, 2010)

(Issued in internet Edition: July 1, 2010)

¹³ 安藤聡、前掲書、246 ページ。